



TITLE:

京大広報 No. 53

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 53. 京大広報 1971, 53: 198-201

ISSUE DATE:

1971-04-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209642>

RIGHT:

京大広報

No. 53

京都大学広報委員会

附属病院の新病棟移転について

去る昭和45年3月に竣工した医学部附属病院の新病棟への移転については、医学部自治会等の反対、職員組合の延期申入れがあり、病院当局との話し合いが行なわれてきた。これに関して、本年3月に総長と職員組合との交渉も再三行なわれ、その中で、看護婦定員の増員について努力すること、予算ベッドを超えるベッドの増設を行なわないこと等が確認され、また、新病棟の設備に関する問題点も幾つか提起された。その一部についてはその場で回答されたが、残る問題についても引き続き病院当局と現場職員との間で話し合われることとなった。

このような経過を経て、3月19日に、「本年度も終りに近づいたので、3月24日・25日を移転日としたい」との病院側の正式意向表明が行なわれた。さらに、移転に当たっては、患者の生命の安全はもちろんのこと、その病状にひびくようなことは絶対に避けなければならないので、移転中にトラブルが起ころぬよう、最小限の予防措置（病院東部構内への関係者以外の立入禁止、機動隊の出動要請など）を認めてほしいとの要請が病院側から総長になされた。そこで、総長は、部局長会議の了承を得て、病院の計画に沿って、府警本部に対し、23日からの警備を要請した。

ところが、22日、関係診療科の器材搬入を開始したところ、妨害に会い、移送が一時ストップし、入院患者の事後の治療にも差し支えるおそれが出てきたので、午後5時半ごろこれを機動隊によって排除した。しかし、病院当局としては、対象となった診療科の患者に与えた不安も大きく、

また、治療に必要な器材の安全確保の見通しもつかないなどと判断し、22日夜からの機動隊の病院構内駐留を総長に要請した。総長はこれに基づき、かさねて22日からの警備を府警に要請した。

以後、23日ベッドの搬入が行なわれ、24日・25日の両日に産婦人科、脳神経外科、耳鼻咽喉科、整形外科、眼科の5科の患者の移送が行なわれた。この間、すでに新聞等で報道されたように、院内で座り込み等の阻止行動があり、学生等に相当数の逮捕者が出たが、患者には故障なく移転が行なわれた。

引き続き、27日に第一外科、泌尿器科の2科の移転が行なわれ、さらに4月1日に第二外科の移転も行なわれ、新病棟への移転は全部終了した。

（事務局）

新病棟への移転について

医学の進歩に伴い、診療施設の改善が必然的に要求されます。他方、既設建物は老朽化してきましたので京大病院においては、昭和38年来施設整備長期計画をすすめて参りました。従来のように各診療科ごとに独立した外来、病棟、検査室の建物をもっていた状態は相互の連絡が悪く、患者にも多くの不便を与えてきました。したがって、この長期計画に当っては、これを集中し、病院として総合的な機能を発揮し得るような形態、所謂セントラル・システムがとり上げられたのは当然のことです。そうして外来—中央診療部門（中央検査部、中央手術部、中央放射線部等）—研究室—病棟が有機的な動線で結ばれるために、限りある敷地において診療施設の将来の発展にそなえるために、また病院環境の整備（緑地化、厚生施設等）の要求に応えるために、建物の高層化

は避けられないことであります。この線に沿って京大病院においては、中央診療棟、外来棟、第一病棟等が建設され、総合的な機能を発揮していることは、御承知のとおりであります。

新しい病棟を建設する計画は、病院施設整備計画の一環として、昭和41年に立案されました。その後、病院協議会、建築委員会において諸専門家の意見を聞き、また当時新設された諸病院を参考とし慎重に審議を重ねた上で、昭和42年5月に旧外科北病棟の位置に総合病棟を建設することとなり、この構想に基づいて第一次平面計画案が本学施設部から出され、それに細部にわたるまでの病院側の要求を盛り込んで行く方法がとられました。昭和43年1月全診療科の病棟医長、副医長、外来医長、婦長、事務職員の合同会議を開き上記計画について検討し、その結果、各科、各部局より要求事項が提出されました。これらの要求が盛り込まれた施設部の第二次平面計画案について、本学施設部や病院担当者と移転各科との細部にわたる折衝が行なわれました。このような経緯の上、昭和43年10月工事設計図が決定され、文部省の承認を経て建築にとりかかった訳であります。

新しい病棟は、昭和45年3月完成し、若干の内部設備の完了をまつのみとなりました。在来病棟と新病棟との設備の比較は別表の如くであり、患者の居心地は良くなり、厨房も近く病棟地下に移りますので食事配膳までの時間が短縮され食物の保温も従来に比べ良くなるはずであります。

昭和45年1月26日病院協議会で移転に向けて準備をすすめることが了承され、同3月移転する科の教官、看護婦長よりなる移転委員会（院長諮問機関）が発足し、移転することが確認され移転の具体的な計画の検討を開始しました。同12月病院協議会で委員会の案を了承し、内部設備の予算執行を決定いたしました。

京大病院は1,100のベッドをもってありますが、人手不足（特に看護婦）のため現在約50%しか動いておりません。移転前においても各科における使用ベッド数については、医師と看護婦との話し合いがなされておりますが、新病棟においても労働強化にならぬよう職員数に見合ったベッド数を使用するつもりであります。いろいろと問題になっている個室の差額料についても、医師が治療上

必要と認めた場合には、差額料を取らずに使用することは、新病棟においても従来どおりであります。

ここに至るまでの間昨年10月総合病棟についての病院長の見解を医学部広報に述べました。今年にはいり京大職組病院支部は15項目にわたる要求を充たしたうえで移転すべきであるとし、病院当局も看護婦の増員には大学として積極的な運動を総長にお願いし、従来より強力に推し進める、病棟事務の増員を行なうことや、定員外職員の待遇改善等には前向きに進めていき当局として可能な限りの努力をはらう等の回答をするとともに新病棟への移転を延期することは、これらのことにもむしろ不利になるおそれがあるという意見を述べましたが納得が得られるに至りませんでした。一方医学部学生自治会に対し説明会を開きましたが、新しい病棟に移ることは医療矛盾を拡大する方向であるという彼等の主張と病院当局の、移転は原則的には旧い病棟から新しい設備のよい病棟へ場所が替るだけのことであり、そのこと自体が医療の矛盾の拡大とは結びつかぬという主張とは対立したままに終わっております。

病院長は、昨年3月建物竣工以来種々の事情で移転がおくれ、既に1年を経過しておりますので3月下旬に移転を行ないたい旨を全職員に対し、周知方3月8日に病院の各部局長に依頼しました。病院当局としては、移転は病院全体の問題ではありますが、前記の如く移転当該科の教職員の意向は重点的に考えるという立場でおりましたので、看護要員から現時点での移転反対の文書を受け取りました第二外科および泌尿器科の移転は一応延期することとし、3月19日婦人科、第一外科、耳鼻咽喉科、脳神経外科、整形外科および眼科の科長に3月24日・25日の両日に移転するよう指示しました。3月末には、看護要員が相当数退職して欠員が多くなるので、この時期をさけたものであります。第一外科は前日になり一人の患者の容態が悪く移動させることは危険であるとの科長の申し出がありましたので24日の移転を中止し、24日には婦人科、耳鼻咽喉科、脳神経外科の三科、25日には整形外科、眼科の二科の移転が行なわれました。26日に至って第一外科の移転が可能の状態となり、また泌尿器科の看護要員も移転

する意向を示しましたので27日両科の移転が実施されました。なお、4月1日には第二外科も移転し、予定された外科系8科の移転は全部完了しました。移転実施に当たっては、一部学生による実力阻止がうたわれておりましたので、患者に不測の事故のおこることをおそれ、警察による23日以降の警備を依頼するよう総長に要請しました。

ところが22日午前10時ごろ耳鼻咽喉科の医療器材等の搬出を開始しましたところ、10時45分ごろ耳鼻咽喉科病棟出入廊下で学生等の妨害に会い、止むを得ずこれを中止しました。午後4時ごろになって再開しましたが、東側廊下において再び妨害を受けました。そのままではその後の入院患者

の移送にも差支えるおそれがあると考えましたので、午後5時30分教官立合いの下に、機動隊によって妨害者を排除し、新病棟への搬入を終りました。

ここに至るまで、新病棟に対し、ペンキによる落書き、投石による硝子破壊があり、またヘルメットを被った集団の連日のデモ、集会が続ぎ、22日午前には、一教授に対する暴行行為があり、患者ならびに教職員の不安も大きく、さらに引続き実施予定の診療科の患者、医療器材等の移送の見通しもたち難いという判断で、病院構内における22日夕刻からの機動隊の駐留を総長に要請しました。(医学部附属病院)

別表 在来病棟と総合病棟との設備比較（在来病棟と異なる点）

建 物 名 称	建 築 年	設 備 内 容													
		冷 房	酸 素 吸 引	リ フ ト	エ ア シ ュ ー タ ー	中 央 集 塵 装 置	ス プ リ ン ク ラ	ラ ジ オ 共 聴 装 置	ス モ ー ク タ ワ ー	誘 導 灯	拡 声 装 置	換 気 扇	乾 燥 室	自 家 発 電	枕 電 灯
総 合 病 棟	昭44	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第 一 病 棟	昭41	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	○
在 来 病 棟	昭13	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

- は設備有 ×は設備無 △は設備一部有を示す。
- 在来病棟は第二外科病棟をあげる。
- 自家発電は計画済で予算要求中（病室内配線は施工済）

昭和46年度入学者選抜学 力試験合格者について

本年度入試の合格者は、さる3月17日（水）から20日（土）までの間に各学部ごとに発表された。当初の募集人員は計2,486名であったが、各学部における審査の結果、全学的には9名の増となり発表された合格者総数は2,495名となった。学部別のデータは下表のとおりである。

学 部	合格者得点		合格発表日時	合格者数	備 考
	最高	最低			
文 学 部	702	552	3 月 18 日 14 時 00 分	204(40)名	募集人員より 4 名増
教育学部	668	563	17 日 11. 30	50(17)	
法 学 部	704	560	19 日 11. 30	334(11)	“ 4 “
経済学部	686	546	18 日 11. 10	200(3)	
理 学 部	740	570	20 日 12. 40	281(11)	
医学部	736	620	17 日 12. 05	101(8)	“ 1 “
薬 学 部	696	515	18 日 14. 00	80(46)	
工 学 部	707	486	20 日 11. 00	945(4)	
農 学 部	668	495	19 日 15. 00	300(24)	
計				2, 495(154)	“ 9 “

- (注) (1) この表は合格発表した時点でまとめたもの
 (2) 各学部とも、総点は 900 点満点である。
 (3) () 内の数字は女子で、内数である。